



アシリコタンは、美幌町都橋地区の美幌川近くの平坦地（写真中央）にあったと考えられています。

■ビホロ・アシリコタン

(原文)

川端^{かわぼた}に出り。此^{ここ}ビホロはアハシリ川の第一の支流にして、川口は沼に入て、川口にては凡^{およそ}巾^ほ三十余間も有。此^{この}処^{ところ}にては凡^{ばかり}二十間計^{ごろたいし}と思ふ。転^{ころ}太石急流。こへて東岸に到る。人家三軒計山の間の十丁計し有平目に住す^{これ すなわち}。是を則^{よし}アシリコタンと云。アシリは新^{よし}義、コタンは村と云儀也。ビホロは前に云ごと小石多く有る処と云り。薄暗きに成りて^{ようやく}漸々着す。

家主土産取シユイベリキン極老、倅^{せがれ}ヤミヤミ、妻テツキンテ、子供シユチレ、弟チシカトヌシと五人にて暮す。然るに此爺の子供等^{ただ}只^{いち}ヤミヤミ^{なり}者人ならで無哉と聞しに六人有るよし申ぬ。其第一番兄と云はチワシノと云て、当所会所元え下げられ雇に到さ有、幾年も故郷え返さず。第二番はシユケテキといへる女の子にて、当時此上の村

のシルトアイノと云ものの妻になりし由。第三番はヤミヤミにて此家にて養ひ居。第四番はシユナンココと云女の子。是もクスリに居て一切山えは帰し不レ遣よし。第五番ヨシキネ是も浜に居り一切山え会所より上せざるよしなり。此次^{このつぎ}第六番此間^{このあいだ}アキベツにて見たるウエントクといへる女の子なり。此爺前にも云如く^{ごと}センタワケより凡十才も年増のよし聞ま、先公料の時の事を問ふに、最上ニシパ、近藤ニシパ等には度々逢、最上ニシパはシヤリに越年したるが、其節は度々行て逢て、此山の事を話し、間宮ニシパはクスリの山々を歩行^{たも}給ふ時に附て歩行、また大塚惣太郎様は我が家にて^{ついで}歩行、また大塚惣太郎様は我が家にて^{たまり}滞留も到され候等、審に語りぬるに、大に我も益を得て、一夜をおもしろく明しぬ。…

(松浦武四郎著 戊午東西蝦夷山川地理^{ぼ ごとうざい え ぞ やまかわ ちり}取調日誌 上「北海道出版企画センター刊」より)

(現代語訳)

美幌川の川辺に出た。ここ美幌川は、網走川の第1の支流で、川口は沼（網走湖）に入り（注：武四郎の記録違いで、直接網走湖には流入していない）、河口にて約50m以上もあり、この辺りでも36mほどと思われる。転太石で急流。ここを渡って東岸に渡る。人家三軒ほどで、山間の100m程の平らな所に住んでいる。

ここを、アシリコタンという。アシリは“新しい”という意味で、コタンは“村”という意味である。美幌は、前に記したように、小石が多くあるという。薄暗くなって、ようやく到着する。

この家主は、土産取り（和人がアイヌにつけた役職）シユイベリキンで、かなりの老人、俵はヤミヤミと言ひ、その妻テツキンテ、子供シユチレ、弟チシカトヌシと5人で暮らしている。ところで、この爺シユイベリキンの子供は、ヤミヤミ1人だけかと聞くと、6人いるという。その一番上の兄は、チワシノと言って、会所元に雇われていて、何年もこの故郷へは帰してくれない。第2番目の子は、シユケテキとい

う女の子で、当時この上の村のシルトアイノとう者の妻になっている。第3番目の子供は、ヤミヤミで、今この家で養っている。第4番目の子供は、シユナンコロという女の子で、これもクスリ（釧路）に連れていかれて、ここへは一切帰してもらえずにいる。第5番目の子供は、ヨシキネというが、これも浜へ連れていかれて、ここへは帰してもらえないでいる。この次の第6番目の子供は、この間、^{あきべつ}飽別で見たウエントクといえる女の子である（注：武四郎の聞き違いか、男の子である）。このシユイベリキン爺は、前にも言ったように、センタワケより、およそ10歳も年上だと聞いていたので、先公料の時のことを聞いてみると、^{もがみとくない}最上徳内氏、^{こんどうじゆうぞう}近藤重蔵氏とは度々会って、この山の事を話し、^{まみやりんぞう}間宮林蔵氏とは、クスリ（釧路）の山々を一緒に歩き、また、^{おおつかぞうたるう}大塚惣太郎氏は、自分の家に^{たいりゆう}滞留したこともあった等の話に、我も大いに参考になった。こうした話をしながら、^{ゆかい}愉快に一夜を語り合った。

（美幌町郷土史研究会 土谷勇次郎氏訳）



美幌の地で松浦武四郎が描いたトエトクシベツ岳（藻琴山）眺望の図（松浦武四郎記念館蔵）